建築　二〇一一年　二月二十四日木曜日（第四週）発行

参版 沈黙の明治村

最終號

通算一四四號

夢の明治村へ 其の五

「先達の夢を読み解く」

西尾壮敏 編集発行

明治村が開村して六年余、移築された建物は三十数棟になっていた。真夜中、警備犬が真暗な窓を見上げて唸り続けている。

第四高等学校内での見えない者達の会議はまだ続いていた。この村の中に移し建てられた建物の多くが品の良い建物だけで、人々が出入りした店も無く物売りの声もしない。村は時代の活気が必要なのだ、と、移し建てられた建物の元住人の霊たちが知恵を絞っているところであった。西園寺公の提案はこうであった。

「…何を為すべきかは、最初から明らかであります。ただ、どのような仕掛けを以って実現するかが課題であります。強いて申せば、働く仕事の中身は判っているが、道具と人が揃っていない。特段の才能が無くとも、人に喜んでいただける仕事というのは結構あると考えられる。そこにこそ、真の解決法が見つかるいくらお題をのたまっていても、手足を動かさねば、人は喜ばぬ。そこで、こんな仕事を提案する。運び屋、飛脚である。何でもどこへでも運ぶ。村の外へではない。村の中だけであるから場所はすぐ分かる。物の重さが心配でも、さほど遠くではないので可能であろう。」

西園寺公の提案に補足するように、夏目金之助が口を開いた。

「隠居様のご提案を是として、補足させていただきたい。飛脚と言いましても、運ぶ物が必要です。そこで我々に必要な日常物資――露伴君が言ったように書き物をする者にとっては紙や筆、墨が必要であるし、西園寺公のお宅や西郷侯の館では、急なご来客に供するお菓子なども要りようでしょう。お酒も買い求めたい。暮らしに必要な品は多種多様であります。であるからそれぞれにお店を構えるのは金も掛かり、敷地の用意もあろうから、あちこちの軒先を借りて、小さな屋台を広げ、夜店の如く開いては如何か。まあ、祭りの夜店と思えば良いだけ。店番が少々留守をするから、飛脚が代わりに物を届けてやるという仕掛けとするのであります。道端が華やかに見えます。この華やかさが肝要であると考えます。」

西園寺公が口を閉じた。

「成る程、イギリス人行っていたあれか。考えが軽やかで宜しい。」

「露伴も漱石に負けまいと立ち上がった。

「私からもご提案したい。あちこちの屋台から品物を集め配達するのも結構かと存ずる。物を積み上げた大八車を曳いて売り歩くのは如何か。飾り付けさえ我々霊界の者が見て確かであれば、村の中の風景として華やかにもなろう。ニッパなど吹けば賑やかでもある。夜鳴蕎麦と同じである。私など毎夜小腹が空いてかなわんから、この仕掛けは大いに助かる。」

夜半からの会議は賑やかに続いたが、窓に明かりが射した時、西郷公が突然

「浅草公園第六区の賑ひ」(右)と浅草公園の夜景(上)　ともに「東京風景(M44.4)」より

「私からも提案致します。明晩、再会致しますのでご参集ください。」

一瞬にして皆消えた。カタン、と音がして西園寺公の杖が倒れた。その杖は月島全漁荘に展示されているものであった。

昭和三十六年から始まった、明治村設立のための会合で、明治村は開村に構想を話し合っていました。この会合で挙げられた構想の中身には、左記のような物がありました。

「旧六聯隊の兵舎」「勝沼、下田などの時計台」「塔のついた学校」「能楽、長崎、大分にはアーチ式の眼鏡橋」「駐在所はないか」「倉敷には土蔵を改良した家がある」「活動写真館、イルミネーション、ゴリンボー、ネジリンボー、スコのナベ料理?」「タイヤキは大正以後だ」「駄菓子、コケシも明治」「東雲楼(遊郭)があれば必ず見物」「ビヤーネ(ビヤーゼはいい)」「蒸気饅頭にやまもち」「ガス灯もイミテーションでなく実物を」

年長の偉い夢声先生が、一番多岐な提案を出しています。

「ゴーストタウンでは、インディアンが出てきたり、オールドアップの実演があって面白い」

何度かの会合が煮詰まって村の建設は進められ、昭和四十年、開村しました。

明治村に集められた建物はそれぞれ貴重な文化遺産です。しかし先達が明治村を立ち上げようとした時に描いていた構想の中の一面でしかないように思います。何故、もっと楽しい姿にはならなかったのか。

▲明治村の銀座通り。今は煉瓦通りと呼んでいます。

会合の中で、徳川夢声初代村長が語った言葉を引用しましょう。

「明治は長かったし、国運が上昇をたどっていた時代だから種々のアングルから見て興味がある。たしかな文化史上、明治時代は頂点で、いいアイデアだ。構想は学究的なものとしたい。また村では中食ができるよう実践部隊の会合で、土川元夫社長が言った言葉も引用しましょう。

「明治村をアカデミックな格調高いものとするためには、イミテーションは一切避け、かかる営業(食堂、売店など)は圏外ですべきだ」

これらの言葉から、明治時代に生まれ育った人たちが造りたかったことは、意気に満ちていた明治という時代の「文化全般」を、正確に体験的に伝えていこうと言うことであったと思います。「建築は歴史の証言者」という言葉を深く受け取ったようです。丁寧に言うなら、「建築は歴史の舞台であるが、歴史を語るがいなくなった時、建物自身が証言者として語るであろう」となる。建築は作られた時代の文化的到達点を写していますが、日本人は建築を清廉化する傾向があって、近代化の光に満ちていた時でさえ、派手さが少なく、文化を享受した人達の姿が、万人に分かる形では浮かんできません。明治村は、自負に溢れた人々の姿を無形民俗文化財のように収集し伝承する役割をいまだ果たし切れていないと思うのです。その収集伝承が実現した暁には、明治村は世界遺産的な価値を持ち、永遠に愛されるであろうし、未来に活気を届けることでしょう。

▲上野広小路会の様子「日本名所勝」(M33.12)より　賑やかですね　たくさんの人たちがあるいています

©国会図書館デジタルライブラリ

▲新緑の明治村　菊の世酒造の建つ高台から内閣文庫の方向を見た景色

最終号ですから、付け加えておかねばならぬ事があります。紙面の手書きを一手に引き受けてくれた女性に、紙面をお借りして、心からお礼申しあげたい。手書を提案してくれたのも彼女であり、風邪などをおして、続けてくれました。三年間、ありがとうございました。読者の皆様方には、私自身が書いているように思われてる方もおられたでしょう。申し訳ありませんでした。でも楽しい紙面でしたでしょう。

さようなら

三年間、ご愛読くださった皆様、かけがえのないご参加くださった皆様、村内でお店をかまえてくださった皆様、ありがとうございました

二階事務所より

内閣文庫

▲内閣文庫

※内閣文庫二階事務所の棚に在る昭和36年からの建築関係書類